

主体的・協働的に学ぶ児童の育成

～「主体的・対話的で深い学び」を促す外国語活動の実現～

新潟市立庄瀬小学校 校長 高島 純

1 はじめに

新学習指導要領の全面実施に向け、小学校における英語の授業力育成が急務である。新潟市は移行期間、2年間前倒しで、外国語（活動）の先行実施を行う。

一方、小学校現場では英語教育に関する不安を抱える教員も多く、当校も同様な傾向にあった。

そこで、今年度、文部科学省委託事業「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」の指定を受け、外部の専門機関や外部講師との連携活動を積極的に行うことで教員の資質や意欲の向上を目指した。

2 主題設定の理由

グローバル化や人工知能（AI）等により世の中が急速に変化されていくことを踏まえると、積極的に他者とのかかわる力の育成が重要視される。

また、言語能力は子どもの学習活動を支える大切な役割であり、多様なコミュニケーションの経験を通して、意思伝達ができることが望まれる。

特に外国語活動や外国語科では、母国語では意識されなかったコミュニケーションの難しさや大切さを学ぶ上で重要である。

そこで、校内研究主題の「主体的・協働的に学ぶ児童の育成」と連動させ、外国語活動における「主体的・対話的で深い学び」について授業研究を重ねてきた。

3 実践の内容

（1）単元型と技能習得型を併用した単元構成

① 単元の最終ゴールの設定（資料1）

学習の意識が継続し授業単位のつながりが明確になるように、単元の初めに最終ゴールを児童と共有した。

② 技能習得型との併用（資料2：例4学年）

目標達成に不可欠な言語材料を習得すべき技能を整理し、単元に計画的に配列した。

③ 単元の可視化と自己評価（資料3：例6学年）

単元計画を児童に示し、単元の見通しをもたせながら授業を進めていく。振り返りカードは単元計画と連動して行い（表裏1枚）、学習意欲等や技能の習熟の進捗状況がわかるようにした。

（2）外部専門機関や外部講師との連携

外部講師による研修を定期的に行った。講師の選定に当たっては、英語教育や協同学習に精通しているということと、実施時期や研修内容が重複しないように配慮した。

【研修協力外部講師】〈資料4参照〉

①新潟大学 教育学部 教授 松沢伸二氏

②新潟市教育委員会 学校支援課

指導主事 大岩樹生氏

授業研究指導（通年）公開研究会指導（11月）

③ NPO 法人 PEN の会 代表 坂井邦晃氏

示範授業・職員研修：新教材の指導等（5月初旬）

④上越教育大学教職大学院 准教授 阿部隆幸氏

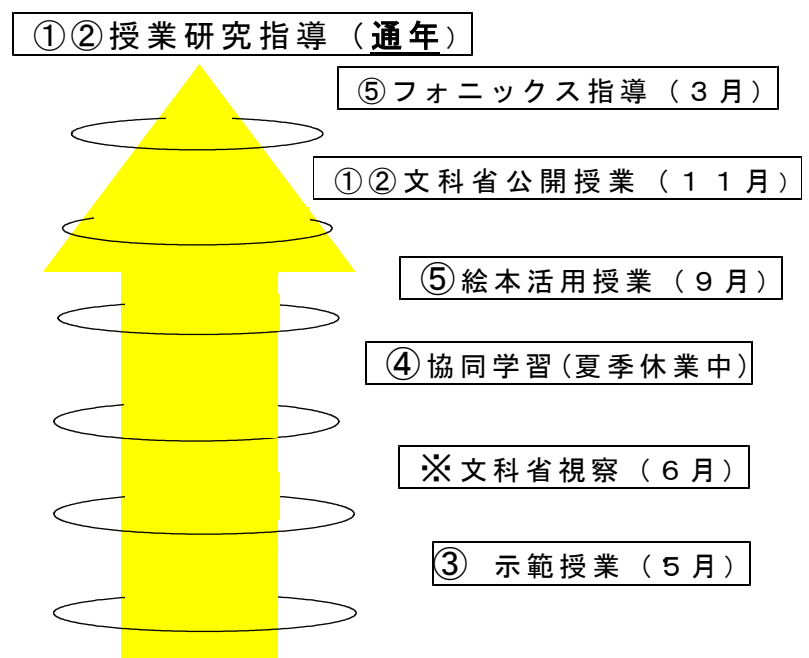
職員研修：協同学習（8月：夏季休業中）

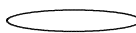
⑤敬和学園大学 客員教授 外山節子氏

示範授業：外国語絵本活用等（9月初旬、3月）

※文部科学省 国立教育政策研究所 直山木綿子氏

事業進捗状況視察・講演（6月初旬）



※縦軸の授業研究の継続に並行して、英語教育や協同学習の研修等（）を適宜取り入れた。

4 研究の視点

外部講師の指導・支援を基盤に、職員で研修や実践を重ねてきた。そこで、主体的・協働的な学びの実現には、単元のゴールの設定が学習意欲の継続や技能の習得に効果的に働き、視聴覚機器の工夫や児童同士が

かかわり合う場の設定や工夫が有効であるという見通しを立てた。そして、副題にある外国語活動における「主体的な学び」「対話的な学び」の達成に効果的な手立てとして、以下のように焦点化し、全員で共通認識をもちながら、授業研究を実施してきた。

(1) 主体的な学び

- ① 単元型と技能習得型を併用した単元構成
- ② 映像やデジタル教材の効果的な活用

(2) 対話的で深い学び

- ③ 対話の場の工夫

5 授業の概要

【第3学年の実践】

- ① 単元型と技能習得型を併用した単元構成

「学習参観でお家の人に英語で自己紹介をしよう」単元の第1時に学習の最終ゴールを示し、単元の学習過程を示し、学習に必要な表現について話し合わせた。その結果、「①好きなもの」、「②好きかどうか？」の答え方や尋ね方に決まった。児童から引き出した課題を掲示・視覚化し、目的を明確にすることで、単元を通して学習意欲を単元終了まで継続できた。

②映像やデジタル教材の活用

テキストの【Let's Listen】から「好きかどうか？」の答え方や尋ね方について、デジタル教材からのポイント



を絞りスモールステップで視聴させた。1回目は映像を隠し、音声のみを聞かせた。児童はすぐに“Do you like ~?”の表現に気付いた。2回目はテキストの絵を隠して“Do you like ~?”の目的語を聞き取らせた。適宜、クイズ形式等で集中力を持続させた。“onion”等、聞き取りにくい音声は、少数の聞き取った児童の発言を繰り返しクラス全体に反映させることで全員が納得することができた。3回目は“Do you like ~?”に対しての返答の音声を聞かせ、“Yes, I do.” “No, I don't.”の表現を確認した。4回目は“No, I don't.”の“don't.”の発音を注意深く聞かせた。ポイントを絞って段階的にデジタル教材を活用したことで、児童は表現すべき音声を推測しながら表現方法を理解した。

③対話の場の工夫

○友達の好きな色を予想して尋ね合う【Let's Play】

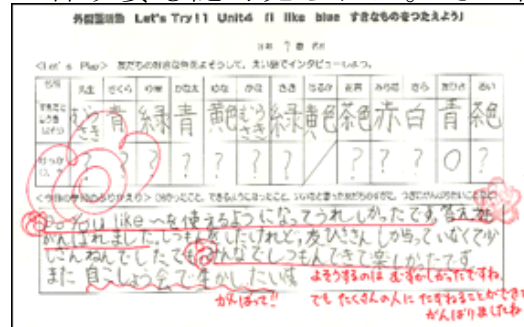


ワークシートに「友達の好きな色」を予想させ、記入後に友達と“Do you like ~?”と尋ね合い、その結果として、“Yes, I do.”と推測が合っていたら「○」を“No, I don't.”だったら、「？」を記入させた。その際、回答結果が正解することよりも、英語で正しく会話することの重要性について押さえた。

児童は、友達の好きな色について、興味をもって聞き、時間内にクラスの全員と会話をすることができた。また、児童が英語の話形を忘れた場合、友達同士で教え合う姿も随時見られた。その結果、全員が“Do you like ~?”を意欲的に繰り返し使い、その表現に慣れ親しむことができた。



児童は、友達の好きな色について、興味をもって聞き、時間内にクラスの全員と会話をすることができた。また、児童が英語の話形を忘れた場合、友達同士で教え合う姿も随時見られた。その結果、全員が“Do you like ~?”を意欲的に繰り返し使い、その表現に慣れ親しむことができた。



児童は、友達の好きな色について、興味をもって聞き、時間内にクラスの全員と会話をすることができた。また、児童が英語の話形を忘れた場合、友達同士で教え合う姿も随時見られた。その結果、全員が“Do you like ~?”を意欲的に繰り返し使い、その表現に慣れ親しむことができた。

【第4学年の実践】

- ① 単元型と技能習得型を併用した単元構成

「ALTを遊びに誘おう」

児童が、ALTを遊びに誘う必要感をもたせるために、ALTの「休み時間に児童と遊びたい」という思いを単元の第1時にビデオレターで伝えた。児童は、ビデオレターのメッセージから、ALTを遊びに誘いたいという思うようになった。ALTを遊びに誘うために必要な内容について考える場を設定し、「遊びの種類」「遊びへの誘い方」の英語での表現について確認した。習得の際には、教師とALTの遊びに誘う会話のやり取りをモデルとして、授業の中で繰り返し活用した。遊びの誘い方の表現や相手の答え方を考えさせる場面では、ALTと教師のやり取りの場面動画を見せ、ALTが誘われた後の言葉に焦点を当てて聞かせた。児童は、ALTの発声言語”Yes, let's.”と気付き、その後の活動につなげていた。

② 映像やデジタル教材の活用

天気を表す言語について、デジタル教材の動画を段階的に活用した。まず、アメリカの天気予報の動画の音声のみを聞かせ、聞こえる単語をもとに天気予報の場面であることを推測させた。児童は、様々な国名や天気を表す言語、画面上のアナウンサーの驚きの声などから、アメリカの天気予報と予想しながら聞いていた。次に、映像を見せながら天気予報を視聴させた。聞こえた音声に合った動画であることや“umbrella”や“hurricane”など、音としては耳に入ったが意味が分からない言葉も、映像と音声を結び付けることで理解することができた。

③ 対話の場の工夫

○ ペア・グループによるインタラクション

「遊びへの誘い方」や、それに対する「回答の仕方」を英語表現を使って、十分に慣れ親しませるためにペアやグループでの



インタラクション（やり取り）を取り入れた。天気カードを引き、天気に合った遊びに誘うカルタゲームを行った。ペアでやり取りをした後、複数の友達が一斉に遊ぶ場面を想定させた。そして、相手の好きな遊び



の種類を聞き、遊びに参加する仲間が全員楽しめるための条件等について、話し合いの中で考えさせながら、友達を誘い合う時の会話

の練習を行った。

【第5学年の実践】

① 単元型と技能習得型を併用した単元構成

I 「わがクラスの時間割をALTに伝えよう」

II 「夢の時間割を友達に伝えよう」

慣れ親しませたい表現を焦点化させるために、単元のゴールを2段階に設定した。

海外の学校生活のデジタル教材を見せたり、ALTの小学校時代の時間割を聞かせたりしたことで児童は時間割に興味を引き



出すと共に、「ぼく（ALT）にもあなたたちの時間割を教えて欲しい」という意識が発生し、そこから第1ゴールを「わがクラスの時間割をALTに伝えよう」と設定した。児童は、時間割を伝えるためには、曜日、教科、“I have ~on.”の言語を英語で話せるようになりたいという思いをもちながら学習を進めることができた。結果、クラス18名中14名がALTに伝えることにチャレンジし、14名が日本語表示の時間割を見ながら“I have ~, ~, and ~ on () day.”と答えることができた。その他の4名もALTとのやり取りの中で時間割を伝えられるようになり、自分で作った時間割を友達と伝えるという第2ゴールへ向かっての活動につながり、全員が“I have ~, ~, and ~ on () day.”と“I want to be ~.”の表現することができた。



② 映像やデジタル教材の活用

“I have ~ on () day.”の表現が含まれるデジタル教材の中から、特に聞かせたい音声に焦点化して、同じ音声を繰り返しながら聞かせた。そして、聞かせたいことを①曜日 ②教科 ③“I have”の音声に絞ったことで、集中して音声を聞き取ろうとする様子が見られた。繰り返し聞かせることで、聞こうとする音声を推測しながら積極的に聞き取ろうとする様子が見られるようになった。

③ 対話的の場の工夫

○インフォメーションギャップアクティビティ

虫食いの時間割を埋めるというゲーム形式を取り入れたことにより、児童は友達に聞く必然性を持ちながら進んでかわり合おうとする姿が見られた。また、ワークシートの色を変えたことで聞こうとする相手を考えながら活動に取り組んでいた。次時では、ALTと児童で異なる時間割表を用い、間違い探しをさせることにより“What do you have on () day?” “I have ~, ~, ~, and ~ on () day.”のやり取りに慣れ親しませることができた。

【第6学年の実践】

① 単元型と技能習得型を併用した単元構成

「ALTの家族に日本の小学生の夏休みの思い出を伝えるビデオレターを送ろう」

ALTから「米国の家族に夏休みの思い出を録画して送って欲しい」を伝えてもらうと、児童は不安そうな様子を見せたが、ALTの実演映像モデルを見ることで活動の見通しをもち、「やってみよう」という意欲をもつことができた。掲示した単元の学習過程をもとに、振り返りカードで自己評価しながら、必要な表現を習得していった。

② 映像やデジタル教材の活用

ALTが夏休みの思い出を話している映像から「毎時間、レターを作るのに必要な表現は何か」と繰り返し動画を見せて、聞こえる音声言語を問うた。「『ハワイに行った。』は何て言っているかな？」「『ハワイアンピザを食べた。』は何て言っているかな？」など、児童はどんな英語表現を使っているのか確認しながら熱心に聞いていた。

③ 対話的の場の工夫

○思考しながら慣れ親しむゲーム

マッチングゲームを通して“*It was ~.*”の表現について“*I enjoyed camping. It was exciting.*”のように「楽しんだ内容」「感想」の意味が合う場合と、“*I enjoyed camping. It was delicious.*”のように状況に適さない言語表現の組み合わせがあることに気付いた。曖昧なものは、適宜ALTに確認しながら活動を進めたことで、自分の考えに根拠をもって選択することができた。



○お互いの表現を確かめ合う

ペアになりイラストを参考にしながら、児童自身の夏休みの思い出について「行った場所」「楽しかったこと」「食べ物」「見たこと」等とその状況に応じた「感想」



を組み合わせた会話の場を設定したことで、児童は自分の表現を確かめたり、見直したりしながら熱心に練習していた。

6 成果と課題（◎：成果 ◇：課題）

- ◎児童に単元の初めに最終ゴールを示すことで活動の目的や場面、状況、相手意識を明確になり、児童全員がゴールの姿をイメージし、意欲的に取り組んだ。
- ◎ALTの映像やデジタル教材の繰り返し、段階的な活用は児童の興味・関心を高めた。
- ◎単元のゴール目標に逆向きの単元構成で対話の場を計画したことにより、学習の見通しがもちやすくねらいが達成できた児童が多く見られた。
- ◎対話の場面で相手の答えを推測させることで、対話をより活性化することができた。また、ALTも対話に加わってもらうことで表現の質が向上し、より深い学びにつながった。
- ◎複数の外部指導者の継続的な活用は教員の資質・意欲の向上に有効だった。
- ◇評定を見据えた評価方法及び評価計画の作成が必要である。
- ◇単元型の外国語活動の更なる開発を行う。
- ◇児童同士の対話場面における発音等の質的な向上を目指す。

7 おわりに

11月に実施された公開研究会では、新潟市内全区の小学校の教員をはじめ、中学・高校の教員、管理職、行政関係等、70名以上の参観者で会場が溢れ、英語教育への関心の高さをあらためて実感した。



また、学校にとって外部講師との連携は授業づくりや教材研究等において大きな支えとなり、積極的に指導・支援を受けることで、職員同士の協働性・同僚性を十分に高め、一人一人が自信をもって外国語の授業と真剣に向き合う姿に繋がった。

新学習指導要領全面実施まで英語教育の課題は山積している。私たち教員自身が自信をもって、英語の授業に安心して取り組めるような教育現場の改善が重要である。今年度の研究を大切に、更なる研修の充実、環境の整備、情報の共有等に励んでいきたい。

